ユニバーサルデザイン研究センターの設立と運営に関する研究

Feasiblity study on the establishment of Universal Design Research Center

古瀬　敏

デザイン学部空間造形学科
Satoshi KOSE
Department of Architecture
Faculty of Design

静岡文化芸術大学の建学理念の一つであるユニバーサルデザインを実践するための仕組みとして、関連する活動を集約する研究所を大学の組織の一部として設立することが可能かどうか、どういうやり方にすればスムーズに活動できるかなどにつき、基本的な検討を行った。本年度は手始めとして、米国および英国において大学の付置研究所としてユニバーサルデザインを中心テーマとして活動している組織の所長を招聘し、情報交換を行うとともに、公開講演会を開催して情報発信に努めた。

Fundamental study was conducted to find out feasibility of establishment and management of research center on universal design, which is the key concept of the Shizuoka University of Art and Culture. As a starting point, two prominent researchers on universal design were invited from the States and the UK, both of whom are the directors of the research center affiliated to the universities. Lecture meetings were held as well, to publicize universal design concept to the general public.

はじめに

当大学の建学理念の１つであるユニバーサルデザインを研究・実践していくためにはいったいどのようにするのが効果的だろうか。当大学に適したより有効な手法を検討するために、この点について経験の深い米国と英国の専門家を招聘して情報交換を行うとともに、その来日をユニバーサルデザインの考え方を一般に広報する機会と考え、大学において公開講演会を開催する企画を立てた。なお、本研究は平成 15 年度学長特別研究（研究代表者：古瀬敏；共同研究者：デザイン学部空間造形学科　渡邊章亙，デザイン学部空間造形学科　川口宗敏，文化政策学部文化政策学科　上野征洋，前デザイン学部生産造形学科　鴨志田厚子，デザイン学部生産造形学科　迫田幸雄，前デザイン学部生産造形学科　木塚泰弘，デザイン学部生産造形学科　迫秀樹）として実施した。以下その経緯と結果を報告する。

ユニバーサルデザインとは

ユニバーサルデザインとは、簡単にいうと「すべての人のためのデザイン」であるが、デザインが利用者を排除しないためにはどうあるべきかを考え、実践するものである。ユニバーサルデザインは、静岡県の行政施策の核心をなすもので、また本学の建学の理念のひとつでもある。とくにデザイン学部におけるデザイン教育・研究にあっては、ユニバーサルデザインが製品から環境にまでまたがる共通概念であることから、個別の学科の枠を超えた共同が必要であり、またそうした共同がより大きな成果を挙げると期待される。さらに、ユニバーサルデザインは利用者と環境・製品・情報などとの関係を検討するものであって、デザインそのものの持つ意味合いだけでなく、それが利用者にとってどういう意義を持つのかも劣らず重要であって、それゆえに文化政策学部との連携による社会的視点を含めた総合的な検討も、今後に向けてより本質的な課題となる。本研究ではその点も踏まえた検討を念頭に置いた。

英米におけるユニバーサルデザイン研究の現状

デザインと利用者との関係は古くから議論されているが、とくにユニバーサルデザイン（あるいはインクルーシブデザイン）という用語が前面に出されてきたのは、この 10 数年のことである。それは、急速な社会全体の高齢化や身体障害者の社会的位置づけの明確化、とくに身体障害者差別禁止という概念の確立に密接に関連している。障害を持つ米国人に関する法律（ADA、1990 年）、あるいは英国での障害者差別禁止法（DDA、1995 年）の成立などに伴って、すべての人を意識するデザインが議論されるようになったものの、現実は法規が明記した点のみを満たそうという動きが強く出て、理念が置き去りにされがちな状況に対して、目で見えやすい身体障害者や高齢者だけでなくすべての利用者に関わることを強調しようとするのがユニバーサルデザインということばである。これに関してはユニバーサルデザインの７原則（注 1）が有名であるが、人によって概念が少しずつ異なって議論されているものの、基本は７原則によってカバーされていると考えてよい。

研究者の招聘

本研究にあっては、上記の７原則を基本としてその由来と現状、そして今後を考えるため、米国と英国から研究・実践の最前線にいる研究者を招聘した。

米国からは、ニューヨーク州立大学バッファロー校教授でIDEAセンター（Center for Inclusive Design and Environmental Access, State University of New York at Buffalo）所長でもあるエドワード・スタインフェルド教授を、また英国からは王立芸術大学大学院ヘレン・ハムリン研究センター（Helen Hamlyn Research Centre, Royal College of Art）所長のロジャー・コールマン教授を、それぞれ招いた。
スタインフェルド教授は、ユニバーサルデザインの父と言われるノースカロライナ州立大学ユニバーサルデザイン研究センター所長であった故ロン・メイス教授らとともに、「ユニバーサルデザインの７原則」の作成に携わったうちの一人であり、また、ユニバーサルデザインの基盤を構成するアクセシビリティ標準の設定のための定量的データ研究に早くから携わっていた、この分野の第一人者である。

一方コールマン教授は、高齢化のためのデザインに早くから携わっていて、DAN（Design for Ageing Network）をヨーロッパにおいて長年推進してきている。そして王立芸術大学にヘレン・ハムリン研究センターを誘致して研究と実践を進め、利用者中心のデザイン（英国ではインクルーシブデザインと表現されることが一般的である）を推進してきた業績で第一回ロン・メイス記念21世紀デザイン賞を受賞している。

ユニバーサルデザイン研究センターのあり方

米国と英国における大学付置研究所として活動している両センターの現況については、参考資料に概要を示すとおりで、大学との兼任スタッフと研究所の専任とが力を合わせて活動している。ユニバーサルデザインに関わる研究委託をさまざまな形で受け入れることで、活動の幅を拡げていることが見て取れる。大学の規模の違いから、本学では同様な対応ができないことも数多くあり、独自の展開を考えねばならないことがわかる。

ユニバーサルデザイン講演会

本学主催のユニバーサルデザイン講演会は、2004年１月15日（木）午後に開催した。先に述べたように、両教授が所長を務めている組織はいずれも大学に設置されたユニバーサルデザインの研究センターであり、それぞれの組織でのデザイン実践を含むこれまでの豊富な経験を踏まえた講演会となった。またそれに加えて、わが国がイニシャティブを取ってきたアジア太平洋障害者の10年を、国連アジア太平洋経済社会委員会（ESCAP）に在籍して中心となって推進してきた琉球大学高嶺豊教授にも、途上国における状況に関しての報告をお願いした。

また、１月17日（土）午後には、浜松市主催としてフォルテで行われたユニバーサルデザインフェアにおいて、本学共催のユニバーサルデザインシンポジウムを開催し、ロジャー・コールマン教授とデザイン学部の古瀬敏教授が講演を行い、その後、会場からのさまざまな質問に答える形でユニバーサルデザインの概念を広報した。

まとめ：今後の展開に向けて

研究拠点としての機能をわが国の仕組みに合わせて達成する方策については、予算制度などが異なるために米英で行われているやり方をそのまま踏襲することはできないが、学が官民と協力するのは、ユニバーサルデザインという実践的な研究分野の性格から必須と判断され、とくに民間からの委託研究に対しては学内連携による学際的検討を通じて総合的な成果を提示できる能力を活用すべきであろう。こうした点を念頭に置き、次年度以降も手法を探ることとしている。

注１）ユニバーサルデザインの７原則（概要）
原則１：誰にでも公平に利用できること

原則２：使う上で自由度が高いこと
原則３：使い方が簡単ですぐわかること
原則４：必要な情報がすぐに理解できること
原則５：うっかりミスや危険につながらないデザインであること
原則６：無理な姿勢をとることなく、少ない力でも楽に使用できること
原則７：アクセスしやすいスペースと大きさを確保すること
和訳全文は下記のアドレス。
http://homepage2.nifty.com/skose/7UDP.htm
また英語原文は以下のアドレス。
http://www.design.ncsu.edu/cud/univ_design/principles/udprinciples.htm

参考文献

梶本久夫監訳（2003）「ユニバーサルデザインハンドブック」、丸善、
川内美彦（2001）「ユニバーサル・デザイン：バリアフリーへの問いかけ」、学芸出版社、
国土交通政策研究所（2001）バリアフリー化の社会経済的評価の確立へ向けて：バリアフリー化の社会経済的評価に関する研究（Phase II）、国土交通政策研究第３号、国土交通省国土交通政策研究所、
古瀬敏（1999）住まい、建物、そしてまちのユニバーサルデザイン、「人間福祉の発展をめざして」、pp. 198-212、勁草書房、
古瀬敏（2001）「建築とユニバーサルデザイン」、オーム社、
古瀬敏（2002）「ユニバーサルデザインへの挑戦」、ネオ書房、2002

参考資料

平成 15 年度に招聘した専門家の所属研究所の諸元はそれぞれ以下のとおりである。

1．Helen Hamlyn Research Centre：ヘレン・ハムリン研究センター

王立芸術大学に 1999 年 1 月に設立。デザイナーと産業界に対して、急速な社会の高齢化がもたらす課題に警鐘を鳴らすことが目的。

ヘレン・ハムリン財団によって支援され、3 つのデザイナー集団、つまり王立芸術大学の（大学院）学生、卒業生、そして産業界のデザイナーたちと協働。

さまざまな外部組織と手を結び、社会の変化に対応する：焦点は、年齢、仕事、移動、そしてケア。

歴史

ヘレン・ハムリン財団とロジャー・コールマンとの共同作業だった王立芸術大学でのデザインエイジ研究ユニット（1991 年から 1998 年）に基盤を置く。

デザインエイジは世界の先進国における急速な高齢化が持つ意味をデザイナーと産業界に知らしめようとした。それは成功し、DAN の設立に至った。EU でのプロジェクトにも加わり、その成果に対しては 1995 年に女王から表彰され、またロン・メイス記念 21 世紀デザイン賞も受けた。その仕事の多くがヘレン・ハムリン研究センターに引き継がれた。デザインエイジは高齢化に焦点を当てていたが、センターではインクルーシブデザイン、すべての年齢・能力について議論。

王立芸術大学のデザインエイジコンペは、「われわれ自身の未来」コンペの中に引き継がれている。

ヘレン・ハムリン財団について

ヘレン・ハムリン女史は王立芸術大学ファッションコースを 1950 年代半ばに終了し、クレスタシルクとデベナムにおいて首席デザイナーとして活躍した。過去 20 年にわたり、彼女は財団を通じて高齢者にとってよりよい環境とよりよい製品のために活動してきた。

同財団は英国の非営利団体であり、高齢者の健康と福祉のためにサービスと施設を提供するよう支援し、また高齢者と地域とがうまくつながるよう支援している。

焦点は高齢者のための住宅と機器のデザインであった。その成果が 1986 年にヴィクトリアアルバート美術館ボイラーハウスでの「高齢者のための新しいデザイン」展示、1991 年デザインエイジの設立、ジョセフ・ロウン・ツリー財団とのライフタイム住宅の普及、そして王立芸術協会の学生コンペでの高齢者のためのデザイン部門の創設である。

同財団はまた、細切れになった高齢者ケアシステムを統合することにも力を注ぎ、モデルを提案している。

2．IDEA Center：インクルーシブデザインと環境アクセスセンター

組織、資源と管理

バッファローにあるユニバーサルデザインに関するリハビリテーション工学研究センター(RERC) は IDEA センターに置かれ、スタッフが重複している。センターの活動はユニバーサルデザインとアクセシビリティに重点を置いている。いくつかのタイプの研究がセンターで行われている：基本的な人間工学デザインデータを収集して整理すること；実際の場面での観察；プロトタイプの実大規模試験；建物のコンピュータモデル化；製品テストと開発である。センターはバッファロー校のキャンパスでオフィス、計算機室、天井の高い実験室空間、図書室、会議室などを合わせ、500 平方メートルほどの広さを占有している。建物はヘイズホールと呼ばれ、歴史的建物であるが、斜路、エレベータ、トイレ、そして避難経路も備わっている。コンピュータシステムは最新で、ソフトウェアも必要なものはすべてある。大学の高速ネットにつながっている。

大学・学部からの支援

スポンサー付きのプログラムの支援
インタネットアクセス
メールリスト運用支援
ソフトのサイトライセンス獲得
会計、財政処理
研究図書室サービス（司書の支援あり）
無料駐車場（スタッフと来客とも）
空間と設備、建物管理
2，3 年ごとに全スタッフのコンピュータ更新
カラー印刷、スキャニング、コピー、大型プロッタなどのサービス
木工室と金工室
論文発表などのための会議参加旅費支援（年 1 回か 2 回）

RERC 研究資金に関連しての支援

IDEA センターの改善のための 15 万ドルの資金：自動ドア、インタホンシステム、オフィスの全般的改修
センターに 2 つのバリアフリートイレ追加
ヘイズホールの改修：斜路、2 つの公衆トイレ改修、外部のサイン、展示室への斜路設置。
エド・スタインフェルド所長に対して 2 学期間の授業免除
スタッフ 2 名の授業負担の軽減
コンピュータサービスを 4 年間にわたって確保
高速グラフィックスステーションなどのコンピュータ借り上げ
コンピュータ消耗品購買の割引手配
外部研究資金の事務局管理経費割合の 50% 軽減

予算

1999 年度より 2003 年度まで：毎年ほぼ 60 万ドル、そのほか追加など若干有り

その他の資金源

RERC 資金を受け始めてから、関連資金をいくつか獲得した。それ以外にサービスに対して手数料を受け取り、それによって学生を助手として雇っている（毎年 1，2 名支援）。それらは以下の通り

UD 教育オンライン；人間寸法ワークショップ；ユニバーサルデザイン・ニューヨーク；住宅のヴィジタビリティとユニバーサルデザイン；車いす移動のための空間要求；ユニバーサルデザイン・ニューヨーク第 2 弾
加えて、CIRRIE 資金を用いて、人材交流を実施した。
エド・スタインフェルドがスウェーデン、オランダ、スペインを訪問、2001 年
アビア・マリックが韓国の会議に参加、2000 年
古瀬敏が RESNA 会議参加とともにセンターを訪問、2002 年
パイヴィ・ターコカリオが RESNA 会議参加とともにセンターを訪問、2002 年
ハリー・クノプスが RESNA 会議参加とともにセンターを訪問、2003 年

スタッフ

エド・スタインフェルド
ヴィクター・パケット
ゲリー・スコット
アビア・マリック
ベス・トーキ
アン・ビサンツ
デニーズ・レビン
ラモン・ガルシア
アレクス・ビターマン

質を向上させるための管理手法

　すべてのプログラムに評価システムが組み込まれている